殿におはせられけるは、○中略我身德行なしといへども、十善のよくんにこたへて、せんていい○鳥羽の太子とむまれ、世ぎやうはく也といへども、萬せうのほう位をかたじけなくす、上皇の尊號につらなるべくは、重仁こそ人かずに入べき處に、文にもあらず武にもあらぬ、四の宮に位をこえられて、父子ともにうれひにぞづみ給ふ、ぞかりといへども、故院おはしましつる程はちからなく、二年の春秋をおくれり、今舊院登遐の後は、我天下をうばゝむ事、何のはゞかりか有べき、定て神慮にもかなひ、人望にもそむかじ物をとおはせられければ、左府もとより此君代をとらせ給はゞ、我身攝籙においてはうたがひなしとよろこびて、もつとも思召立處ぞかるべしとぞすゝめ申されける、

〔愚管抄五〕主上二條院の外舅にて、大納言經宗、ことに鳥羽もつけまゐらせられたりける惟方、撿非違使別當にて在ける、この二人主上にはつきまゐらせて、信賴同心のよしにて有ける、○中略後白河院をば、その○永暦元年正月六日、八條堀河の顯長卿が家におはしまさせけるに、その家には棧敷の有けるにて、大路御覽じて、下衆など召寄られければ、經宗惟方などさだして、堀河の棧敷を板にて外よりむす〳〵と打つけてけり、かやうの事どもにて、大方此二人して世を院にしらせまゐらせじ、内の御沙汰にてあるべしと云けるを聞召て、院は清盛をめして、わが世にありなしはこの惟方經宗にあり、是ら思ふ程いましめてまゐらせよとなく〳〵仰有ければ、その御前には法性寺殿もおはしましけるとかや、清盛又思ふやうども有けん、忠景爲長と云二人の郎等して、この二人をからめとりて、陣頭に御幸なして、御車の前に引すゑて、おめかせてまゐらせたりけるなど世には沙汰しき、その有さまはまが〳〵しければかきつくべからず、人皆しれるなるべし、さてやがて經宗をば阿波國、惟方をば長門國へ流してけり、

〔神皇正統記二條〕保元平治よりこのかた、天下亂れて、武用盛に、王位輕くなりぬ、未だ太平の世に